

世代交代について

| 村井 俊哉 Toshiya Murai

今期理事会の新しい取り組みとして、各種委員会委員への立候補や推薦を広く募ることとした。委員会委員の任期は2年であるが、2年経つごとに各委員は正確に2年年齢を重ねる。このことから、世代交代の推進は、当学会にとっての必然的ミッションである。「世代交代」という必然的であるがゆえに普段あまり考えることもない事柄について、これはそもそもどうということなのかを少し考えてみた。

会員データベースにアクセスして計算したわけではないが、日本精神神経学会の会員全体でみると50歳代前半のどこか(α歳)が会員の年齢の中央値ではないかと推測する。ただし、この中央値のα歳より上の世代が後進にバトンを渡す側の旧世代、α歳より下の世代が先人からバトンを受ける側の新世代、という単純な話ではない。すべての会員が、バトンを渡す役割とバトンを受ける役割の両方を担っている。入会したばかりの新会員であっても、未来の精神科医に対して、バトンを渡す役割を早速担うことになる。まもなく引退を迎える世代であっても、この仕事を続けている限りは、過去の無数の先人からバトンを受け続けているといえる。

では、全会員がバトンを渡す立場と受ける立場の両方をもっているという観点に立つ場合、それぞれの立場における心構えはどのようなことになるだろうか。

まず、バトンを渡す立場での心構えであるが、大事なことはやはり、人に任せてみる、という思い切りであろう。現在その役割を果たしている人は、その仕事に最もふさわしいからこそその役割にあるのだろう。だとすると、能力のみで選ぶなら、今の人がずっとその仕事を続けているほうがよいことになる。しかしそれだと世代交代は進まない。どこかで思い切って次の世代に役割を譲っていく心意気が必要になる。

バトンを受け取る立場でもう1つ考えておかなければならないことは、「未来は根本的に変わるかもしれない」ということである。自分自身が慣れ親しみ適応してきた価値観さえも

根本的に変わってしまった未来の世界における未来の精神医学のことは、未来の世代を信じて託すしかない。こうしたことは、当学会の活動に限ったことではなく、人類のすべての活動に共通したことであろう。

一方で、バトンを受け取る立場での心構えは何だろうか。答えの1つは、先人・先輩への「敬意」ということになるだろう。精神医学は、(行きつ戻りつしつとも)長い目でみると進歩を続けてきた。これからも進歩するだろう。新しい世代から見ると先人の行ってきた精神医学実践が見劣りするように見えるのは、進歩というこの現実のためである。しかし、「巨人の肩の上に乗る」という言葉がある。進歩を信じてよりよい精神医学をめざしつつも、肩を貸してくれている先人への敬意を忘れないように心がけたい。

バトンを受け取る立場でのもう1つの心構えは、先人・先輩への「理解」ということであろう。それも、先人が活動した時代時代の文脈のなかで先人を理解しようとする態度である。精神医学の歴史は単に進歩の歴史ではない。それぞれの時代に固有の人類の営みのあり方のなかで、それぞれの時代の精神科医(あるいはそれに類する立場にあった人たちが)力を尽くしてきたのが精神医学の歴史である。「過去を回顧する際に、過去を今日の見方によって変形すべきではない。重要なことは、歴史的な出来事のそれぞれが持つ固有のロジックと、それらの出来事が現在に対してどういう意義を持つのかということである」¹⁾。これは、最近、精神医学史の入門書の翻訳出版の仕事をしていて、著者の心に刺さった言葉である。歴史には進歩という側面だけでなく、「そのように流れている」としか言いようのない側面がある。時代によって異なる価値体系や世界のあり方のもとで活動してきた精神医学の先人の営みを、可能な限りの想像力で理解しようとする視点をもち続けたい。

1) ブリュクナー、B. (村井俊哉、川島 隆監訳)：入門 精神医学の歴史。日本評論社、東京、2023